

日本地衣学会 ニュースレター

No.128

Newsletter from the Japanese Society for Lichenology

目次	会員通信	475
	雲南地衣類調査行2014(その3) / 原田 浩	475

会員通信 *From Members*

雲南地衣類調査行 2014 (その3)

A field trip for lichen study in Yunnan, China, 2014 (Part 3) / by Harada H.

>>>>> 原田 浩: 千葉県立中央博物館

金沙江本流へ

4月19日、カシ林から再び昨夜の投宿地に戻り昼食を済ませ、いよいよ金沙江への本流へと向かう。峠を越えた斜面には乾いた段々畑が広がっていた(図1)。



図1. 斜面には段々畑が広がる(標高2050m)。

道路脇のところどころにコンクリート製の水瓶らしきものが見られた(図2)。この地方特有のものなのだろうか?これまで雲南では見たことが無いものだった。

急斜面に張り付いたような道路を走っていくのは、壮大な景観を望むことができている。しかし、たった三日目なのに暑さのせいで皆疲れているのか、車内は静かになっていった。一時間も走っただろうか、道路は徐々に高度が下がり、金沙江のほとりの村へと到着した。



図2. 水瓶?



図3. 金沙江を挟んで四川省側（北）を望む（標高約 950m から）.



図4. 調査地点の斜面から金沙江上流方面（西）を望む（標高 1100m から）.

ダンプカーが走るたびに、ものすごい土ぼこりが舞い上がった。しかも今まで以上に暑い。これから、金沙江沿いに西に遡って行く予定だ。

金沙江の対岸は四川省。ここは、抗日戦の長征の際に、四川省から雲南省側に渡河した地点なのだそう。雲南省のこちら側には、それらしきモニュメントがあった。その背後の山は赤茶けて見えた。こんなところで調査するのだろうか……。対岸の四川省の急斜面には、つづら折りとなった道路が刻まれていた(図3)。

橋を渡った四川省側のほとりの宿に荷物を預け、再び雲南省側に戻り調査をすることとなった。宿からよく見えるが、あのモニュメントの下から見たように斜面全体がカラカラに乾いているように見えた。農家の間を通過して登っていくと、予想以上に暑かった。少し上った地点(川面からは100m位の比高だろうか)からの眺めはなかなか良かった。金沙江の上流側(西側)を望むと、日差しは強いのだが遠くはかすんで見えた(図4)。気温はきっと35℃を超えているのだろう。5月になると40℃になるのだそう。この時期はまた、

よく西風が吹くが、この風のことを紅風(ホンフェン)と呼ぶのだという。紅い熱風といったところか。本誌124号の図3に示したように、西から吹いてくる風は、いくつもの山脈を越えてくるたびに水分を失い、つまり、フェーン現象により暑く乾燥した空気をこの地域にもたらすのだ。また暑く乾燥した土はラテライト化して赤みを帯びており、これが風により巻き上げられ赤く霞む。まさに紅風。そういえば、北京から昆明に向かう飛行機の窓から雲南省の山岳地帯が見えたが、赤っぽいもやがかかっているようだった。もしかしたら、この付近の上空を飛んでいたのだろうか。

斜面はもろく、岩のかけらを落とし兼ねないので、7人が密集しては危険と判断し、二手に分かれ、私と王欣宇、楊さんの3人が移動した。足元の岩はいったい何度まで上昇しているの

だろう。とても暑い。しかしこんな上にも地衣類は生えている。茶色っぽいのはミドリゴケ属 *Endocarpon* とたぶんホウネンゴケ属 *Acarospora*、黒っぽいのはツブノリ科 *Lichinaceae* だろう。岩の間の土にも似たような色彩の地衣類が見受けられた。

新たな情報によると、当初予定していたルートは不通になっているのだという。先に進むには元来た道に戻るのか、四川省側の内陸を歩いていくしかないのだという。もちろん行くでしょ、新しい道へ。(結果として本誌124号、図4のルートをたどる。ここは地点1)

翌20日の朝は、昨日雲南省側から眺めたあの斜面の道路を登っていくことになった。図3の①の地点が最初の調査地、標高1180m、川面から標高差が凡そ250mといったところか。昨日渡った橋も小さく見えた(図5)。程よい大きさの岩が多数露出していて、足場は悪くない。昨日の谷底近くの岩場に比べて地衣類も豊富のようで、色彩もいろいろだ。フジカワゴケ



図5. 四川省側の斜面での調査。金沙江にかかる橋が見える。(図3の地点①、標高1180mから)。



図6. ツブノリ科 (Lichinaceae) ? 形はフジカワゴケに似ているのだが・・・

Toninia tristis もあるし、わずかだがウメノキゴケ科もある。土の上にはヒメカワイワタケ属 *Placidium* も生えている。一番印象に残ったのは、図6の地衣だ。先が丸い円筒形で中は空洞。これが集合し、時に半球形になるあたりはフジカワゴケに似ている。だが決定的に違うのは、その黒っぽい色だ。明らかにラン藻を共生藻とするので、緑藻を共生藻とするフジカワゴケ

ではない。ツブノリ科だろうか？

次の調査は図3の②の地点(標高 1550m)で済ませると、あとはひたすら四川省を走り、100km以上先を再び金沙江を渡り(本誌 124号、図4の地点2)、雲南省に入り南下した。次は、いよいよ「土林」だ。

(つづく)

●複製される方へ

本誌に掲載された著作物を複製したい方は、許諾を受けてください。詳細は本誌 102号 378ページに。

●Notice about photocopying

In order to photocopy any work from this publication, you or your organization must obtain permission. For details, see No. 102, p. 378 of this publication.

●*Newsletter from the Japanese Society for Lichenology*, no. 128, pp. 475-478: eds. Kinoshita K., Komine M. & Harada H., published by *the Japanese Society for Lichenology*, 7 June 2015.

日本地衣学会ニュースレター 128号

発行日：2015年 6月 7日

編集：木下 薫・小峰 正史・原田 浩

発行者・発行所：日本地衣学会

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3丁目3-35

関西大学 化学生命工学部 生命・生物工学科

微生物工学研究室

©2015 日本地衣学会 (© 2015 The Japanese Society for Lichenology)

本誌記事の著作権は日本地衣学会に属します。無断転載・無断複製等は固くお断りいたします。